

# 作文 4

小宮 修太郎

## Composition 4

KOMIYA Shutaro

### はじめに

作文4では、中級レベルの学習者を対象として、物語文・説明文・報告文を書く練習をしている。補講の作文コース全体の中での位置づけという視点から、このレベルでは、レポートなどの論理的な文章が書けるようにするための基礎作りを中心目的とすべきだと考えている。そのため、1つは、文章の種類毎に書く目的と書き方のポイントを理解した上で、各文、各段落を書くように指導している。その中で、とくに中心文・支持文から成る段落の作り方の習得に重点を置いている。また一方では、文法・文型・単語・表記などの各側面でも正確さが高まるように、文作りの練習や作文フィードバックの中での指導にも力を入れている。

### 1. クラス規模と属性別構成

受講者の人数と属性別構成は、読解4とほぼ共通している。時間割の上で連続しているためもあり、多くの学習者が読解4と作文4の両方を受講するという傾向がある。人数は、各学期の平均で約20名である。所属別構成では、大学院の研究生の割合が約4割を占め、最も多い。

このように研究生の割合が多いのは、入試で小論文を書く問題が出題されることとの関係もあるのではないかと思う。受講の動機は調査していないが、いずれにせよ、論理的な文章を書く練習には強いニーズを持っているグループであると言える。

### 2. 主な目的と、教材作成・教室活動のねらい

補講の作文コース全体は、「大学での勉学に必要な作文能力を発達させる」という共通の目的を持っている。その作文能力の中で特に必要なのは、レポートなどの論理的な文章がよく書けることであると思う。こうした目的を持つ作文コース全体の中で位置づけると、作文4では、「論理的な文章が書けるようにするための基礎作り」を中心目的とすべきだと考えられる。このことを意識した上で、次の目的を設定している。

- ① 大学での勉学で必要となる日本語作文能力を発達させること。
- ② 書き言葉でよく使われる文型、表現を習得すること。

- ③ 文法や文字表記の面で、より正確な書き方ができるようにすること。
- ④ 各段落と文章が、読みやすく、論理的に書けるようにすること。
- ⑤ 説明文・報告文などの種類の文章が、目的にあった形で書けるようにすること。

このうち、①は、上記の意味をこめたものであり、総合的な目的と言える。一方、このレベルでは、②や③も大きな必要性を持っていると思う。そのため、文作りの練習や作文フィードバックの中で、これらの面の指導にも力を入れている。また、作文の添削は、一度自分で直し方を考えさせて、間違いが少なくなるようにするやり方をとっている。

④の中で、1つは、「論理的な文章の段落の作り方」の習得に重点を置いている。具体的には、中心文と支持文などから成る段落の書き方であるが、これは報告文の各課で練習させることにしている。この書き方の必要性が一番理解されやすい文章種類だと思うからである。

また、文章構成の習得という面でも、3つの課で指導を行っている。まず、説明文では「時間的順序で」と「全体から部分で」という2つの型を示し、応用練習や各課の作文で実行するように指導している。また、報告文では、「序論・本論・結論」という構成を示し、各部分の練習と全体の練習の中で習得が進むように配慮している。

⑤の「目的に合った・・・」ということには、たとえば、説明文は「読み手の必要にあったものにする」という条件、報告文は「客観性の感じられる内容と書き方で」という条件に合った文章にするという意味も含まれる。文章の種類ごとの目的の違いと、そこから生じる文章形式の違いをはっきり意識させて、各文・各段落を書くように指導していきたいと思っている。

なお、コースの最初には、16コマのマンガをもとにして物語文を書かせている。そのねらいの1つは、上記のような文章の種類による書き方の違いをはっきり意識させることである。同時に、コースの初めに各個人の作文能力の水準や問題点をつかんでおきたいこと、コース全体への導入部に適していることなど、複数のねらいがあって、これを最初の課にしているのである。

### 3. 内容と方法

コース全体を大きく3つに分け、物語文・説明文・報告文を合計6つの課で学ぶという構成にしている。ここでは、報告文の場合に限定して、内容・方法を詳しく述べてみたい。

#### 【報告文の場合】

報告文というのは、ここでは、「調査の結果をまとめて報告するときに書く文章」という意味である。コースのシラバスでは、その4課から6課までを、報告文の学習にあてている。

その最初となる4課では、課の中心目的を「1つの段落をわかりやすく書く」ことにするとともに、練習の内容の中心は「表やグラフからわかること」の段落を書くことにしている。授業では、まず、習得すべき段落の作り方について、詳しく説明する。中心文といくつかの

支持文によって一まとまりの段落を作るというやり方であるが、これを十分に理解してもらうには、順序良く、わかりやすく説明する必要がある。この説明と結びつけて、段落の作文例を読ませる。具体的な例を見ないと、実感しにくいことだからである。

次に、「この課の作文表現」という項目で、習得してほしい文型や、接続詞・副詞を示し、かんたんに説明する。その後、すぐに基礎練習に入る。初めは、グラフを見ながら、「グラフからわかること」を書いた段落を穴埋め記入で完成するといった、かんたんな問題に取り組ませる。その後は、表やグラフを見て、同様な段落を自分で書かせる。何人かに発表してもらい、コメントを加える。

さらに、応用問題として、意見文の一節になるような段落を書く練習に取り組ませる。たとえば、「現代の生活で、テレビはどんな点で役に立っているか」などである。この練習は、まず中心文だけを考えて作ること、次に、それを中心文とする段落を作ること、という2段階に分けて行わせている。この練習は、時間内に終わらない時は、宿題にしている。

5課の主な内容は、「原因を説明する段落」を書く練習である。ここでも中心目的は段落の作り方であるが、練習方法は違うものになっている。授業では、まず、目的をかんたんに説明し、次に報告文の本論部分の作文例の読み合わせをする。本論部分だから、「グラフから分かることの段落」に続いて、「原因を説明する段落」が出てくる。これは、段落のモデルを示すとともに、報告文の本論のモデルを示すためのものである。したがって、段落と段落のつなぎ方にも注目させる。次に、「この課の作文表現」として、原因の表現、結果の表現の文型を示し、説明する。

練習では、まず、文レベルの基礎練習を行う。文型の習得や、正確さの向上を目的とする練習である。さらに応用練習として、あるグラフをもとに、本論部分の内容を考え、各部分を書く練習を行う。これは、クラス全体で話し合うことから始める。そのほうが、全部の学習者の思考作業を誘導しやすいと思うからである。書く練習では、4課と同様に、まず中心文だけ、次に段落の全体をという順序で作業を行わせている。作文練習は、グラフをもとに報告文の本論を書くことであるが、これは、5課の2コマ目で行うようにしている。

6課の内容は「報告文の全体」を書く練習であり、中心目的は報告文の文章構成と、各部分の書き方の習得である。そのため、前半では、序論・結論の練習を行い、最後は報告文全体を書く作文練習を行わせている。授業では、まず、報告文を書くときのポイントと文章構成を説明する。重要なポイントとして、「客観的に書く」、「わかりやすく書く」の2つをあげ、それが報告文という文章の目的とともに理解されるようになることを目指している。文章構成の説明では、各部分でどんな内容のことを書くべきかがはっきり理解されるようにする必要がある。そのため、ここでもモデルの作文例の読み合わせを行い、実例で分かってもらうようにしている。次に、序論と結論でよく使われる作文表現を、わかりやすい例文とともに紹介し、説明する。

ここでは、まず、序論を書く練習を行う。これは、ある調査の概要を示す情報メモをもとに、それを内容とする序論を書く、という形のものである。次に、その調査の結果をまとめた表を見て、そこから分かること、注目したことを考えさせ、各人に発表させるという口頭の練習を行う。これは、結論を書く練習と作文練習につながる布石でもある。さらに、同じ調査をもとに書かれた、ある本論につながる結論部分だけを書く練習を行う。最後に、同じ調査について自分が考えたことを内容として、報告文の全体を書く作文練習を行う。これは、宿題または2コマ目の練習になることが多い。

以上のように、報告文の練習は、論理的な文章を書けるようにするという目的に向かって組み立てられた1つのユニットという性格を持つものになっている。

#### 4. 成果と問題点

1つの成果としては、「段落を単位として文章を作る」という意識が定着したという点があげられる。というのは、期末テストで報告文の本論を書かせた結果、ほとんどの学習者がグラフの分析の段落および複数の原因説明の段落をそれぞれはっきり分けて書いていたからである。また、段落のつながりにも論理性が感じられることが多かった。しかし、一方では、中心文・支持文から成る段落の作り方を必ず実践している例は少なく、この面はまだ定着していないことがわかった。

2つ目の成果としては、書き言葉の文型・表現の習得、および、「である」体の文体への統一という点で進歩が見られたという点があげられる。期末テストの作文では、「作文表現」の文型を使っている例が多く見られたし、文体上の問題点は見られなかった。

3つ目に、正確さの向上という目標についても、ある程度の進歩が見られたことである。具体的には、助詞および文構造の面での間違いが減少していることなどである。しかし、一方では、単語・表現の適切さの面での間違いなどは、あまり減少していない。

4つ目に、報告文や説明文が目的に合った形で書けるようになるという目標も、ある程度達成できたと感じている。前者については、期末テストの結果から判断できるし、後者については、3課の宿題とした作文にわかりやすく、構成も良い例が多かったことによる。ただ、報告文の結論の書き方は、6課の練習と作文の結果から見る限り、まだ不十分なものとどまっているようである。

以上のように、目的とした項目のそれぞれについて、何らかの進歩が見られると同時に、なお不十分な点もあるということがわかった。全体的には、論理的な文章を書く能力の育成に向けて、一定の貢献はできているのではないかと思う。